

曲目解説

各校顧問の練りに練った選曲により、毎回充実したプログラムで注目を集めているジョイントコンサート。私が曲目解説を書くのも、早いもので9回目となりました。今回も新作、話題作が目白押しなので気合いを入れて解説を書きます。演奏曲数が大変多いため、各校演奏・学年バンド演奏のみの紹介です。

「カヴァレリア・ルスティカーナ」間奏曲

"Cavalleria Rusticana" Intermezzo

ピエトロ・マスカーニ

Pietro Mascagni (1863-1945:イタリア)

1890年に初演された歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」は、シチリア島が舞台の恋愛悲劇で、ヴェルガ(1840-1922)の短編小説に基づいている。主人公トゥリッドゥが出征中に、彼の恋人ローラは別の男アルフィオと結婚、しかし出征から戻ったトゥリッドゥはローラと不倫関係になってしまう。それが発覚、最後はローラの夫・アルフィオと決闘して負けるという内容である。1888年に楽譜出版社が主催したオペラ作曲コンクールに、当時20代だったマスカーニが応募し、見事に1位を獲得した作品である。今回演奏する間奏曲はオペラ内に使われている有名な曲で、大変美しく歌われる。その美しさゆえ単独演奏されることも多い。

悪魔の踊り

Danse Diabolique

ヨーゼフ・ヘルメスベルガー

Joseph Hellmesberger Jr. (1855-1907)

小澤征爾の指揮で脚光を浴びたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団(ウィーン・フィル)「ニューイヤー・コンサート2002」。毎年元旦にウィーンで開催される伝統ある演奏会だが、2002年の選曲で話題になったのがヘルメスベルガーの「悪魔の踊り」である。作曲者は優秀なヴァイオリン奏者として知られ、ウィーン・フィルの5代目コンサートマスター、首席指揮者を務めた経歴を持つ。木管楽器が活躍し、スピード感あふれる作品だが、中間部はゆっくりな3拍子となり緩急の変化にも富んでいる。最近は吹奏楽で演奏される機会も増えてきた。

「第六の幸福をもたらす宿」より

第3曲 ハッピー・エンディング

The Inn of the Sixth Happiness - Mov.3 (Happy Ending)

マルコム・アーノルド

Malcolm Arnold (b.1921:イギリス)

アーノルドは多岐に渡る分野に数多くの作品を残しているが、なかでも世界的名声を獲得するきっかけとなったのが、数々の映画音楽であろう。1957年公開「戦場にかける橋」ではアカデミー作曲部門賞に輝いている。今回演奏するのは、こちらも有名な映画、1958年公開「第六の幸福をもたらす宿」である。映画音楽を再編集して作られた全3曲から成る組曲で今回演奏する第3曲「ハッピー・エンディング」は、輝かしく始まり、全体的に親しみやすい音楽で展開される。なかでも後半のピッコロソロから始まる可愛らしいメロディが印象的で、つい口ずさみたくなるだろう。最後は映画の最終場面の音楽で力強くフィナーレを迎える。

「ドラゴンの年」より

第3楽章 フィナーレ

The Year of the Dragon - Mov.3 (Finale)

フィリップ・スパーク

Philip Sparke (b.1951:イギリス)

スパークは楽譜出版社(Anglo社)を経営する傍ら、多くの優れた吹奏楽曲を手掛けている。国際的に大変権威のある作曲賞も受賞しており、吹奏楽界で最も活躍している作曲家の1人であると言える。その作品は、比較的平易な初心者向けの曲から、大変難度の高いハイレベルな曲までであるため、幅広い層で演奏されており、多くの曲が高く評価され、人気も高い。

ウェールズの国の紋章"レッド・ドラゴン"(赤い龍)をタイトルに持つこの作品は、最初は金管バンド曲として1984年に作曲された。翌年、作曲者自身の手で吹奏楽版が完成し、爆発的ヒットで迎えられた。全3楽章から成り、楽章毎に緩急変化に富んでいる。今回演奏する第3楽章は大変躍動的な楽章で、圧倒的なパワーで突き進み、フィナーレへと向かって行く。

ライド

Ride

サミュエル・ヘイゾ

Samuel R.Hazo (b.1966:アメリカ)

アメリカの若手作曲家ヘイゾによる話題作。スコアノートに作曲のいきさつが記載されている。ヘイゾら若手作曲家を育成するために、インディアナ大学ペンシルバニア校で教授を務める作曲家J.スタンプ(b.1954)は、彼らの作品を頻繁に演奏したり、作曲家フォーラムを開催するなど活動を行なっている。2002年のフォーラム開催の夜に、彼らを自宅での夕食に招待したスタンプは、自宅まで彼らを車に乗せてドライブしたが、そこで景気づけにギアをトップに入れてフルスピードで田舎道を走り抜けた。それに同乗していたヘイゾは、ペンシルベニアの美しい風景、フルスピードで疾走する快感、スタンプへの感謝の気持ちなどから、頭の中でこの作品を完成させた。曲のタイトルもその際につけた。一気に駆け抜けるような曲だが、途中にジャジーな部分も現れる。演奏時間3分と短い、実に60回以上もの拍子の変化が使われており、トップスピードで疾走するスリルや高揚感が見事に表現されている。

交響曲第2番「キリストの受難」より

第1楽章 降誕、虐殺、洗礼式

Symphony No.2 "La Passio de Crist"(The Passion of Christ)

- Mov.1 (Birth, Massacre of the Innocents, The Baptism)

フェレル・フェラン

Ferrer Ferran (スペイン)

スペインも吹奏楽が盛んな国で、大変優れたバンドや作曲家を有する。近年、吹奏楽曲の作曲家では、フェランの活躍が目ざましい。イタリアのコレチアーノ国際吹奏楽作曲コンテストで、2000年から3年連続で入賞するなど、現在、注目度ナンバーワンの作曲家である。

キリストの生涯に関しては、これまでも様々な音楽で描かれて来たが、フェランは吹奏楽でこれに挑んだ。交響曲第2番「キリストの受難」は、キリストの誕生から磔刑までを描いた、全3楽章、演奏時間40分のダイナミックな超大作である。2002年に出版され、大きな反響で迎えられた。今回演奏する第1楽章は演奏時間7分間ほどで、キリストの誕生から、ヘロデ王による幼児虐殺、洗礼式までが描かれている。なお、今回演奏する市川西高校は、2005年3月28日(月)の定期演奏会で、この作品の全曲演奏に挑戦する。そちらもお聴き逃しなく！

ビッグ4 ドリーム・バンド - 中学校・招待演奏 -

市川市立第七中学校、市川市立福栄中学校、市川市立南行徳中学校、市川市立妙典中学校

今年度、市川市内の中学校4校の吹奏楽部によって結成された、総勢150名に及ぶ大編成の吹奏楽部合同バンドです。今秋完成した「行徳文化ホール」の柿落としの演目に抜擢されたことがきっかけで、このユニットの企画が生まれ、普段あまり交流することのなかった学校間での部員同士の親善も、活発に図られるようになりました。

演奏曲目は、ビッグ4のために書き下ろされたオリジナルか、リアレンジされたものをレパートリーとしており、今夏開催された「市川シーサイドフェスティバル」において、その形態を初披露。迫力あるサウンドは大変な評判を呼びました。また先日行なわれた「親子と楽しむ音楽会」では、アマチュアとして唯一招待され著名なプロと共演を果たすなど、その活動は多くの人達から注目を集めています。

主な活動実績

市川シーサイド・フェスティバル

行徳文化ホール落成記念演奏会

市民まつりオープニングセレモニー

市内音楽会

千葉県管楽合奏フェスティバル(優秀賞)

親子で楽しむ音楽会

など多数

踊りあかそう

I could have danced all night

フレデリック・ロウ

Frederick Loewe (1904-1988:アメリカ)

ジュリー・アンドリュース主演のブロードウェイ・ミュージカル「マイ・フェア・レディ」は1956年初演、ブロードウェイ・ミュージカル史上、最高のヒット作とも言われている。1964年にオードリー・ヘップバーン主演で映画化され、世界的に有名になった。この曲は主人公イライザが、*"The rain in Spain stays mainly in the plain."*と初めてうまく発音出来るようになり、その喜びを身体いっぱい表現しながら歌うシーンで登場する。この作品中で最もヒットした、いわば主題歌とも言える曲である。主人公の喜びが伝わってくるだろうか。

「モアイ」 - 太陽をみつめる七体の巨像

Moai - The Seven Giant Statues Gazing at the Sun

八木澤教司

Satoshi Yagisawa (b.1975:日本)

八木澤教司さんは市川市在住の若手作曲家で、管弦楽曲、吹奏楽曲、アンサンブル曲など幅広いジャンルの作品を手掛けている。2002年作曲の「吹奏楽のための音詩～輝きの海へ」は、これを委嘱した市川市立新浜小学校吹奏楽部によってコンクールで演奏され、同吹奏楽部は平成14年度の「文部科学大臣奨励賞」を受賞、八木澤作品が全国に広く知られるきっかけとなった。全国からの作曲依頼も多いが、市川市民ミュージカル「いちかわ・真夏の夜の夢」の音楽担当(2002年)など、地元でも活躍している。また、市川西高校吹奏楽部のために「ザ・ウエスト・シンフォニー」(全4楽章)を4年計画で作曲中で、2つの楽章が完成済みである。

今回演奏する「モアイ」は陸上自衛隊東部方面音楽隊委嘱による2004年新作で、太平洋に浮かぶイースター島に立ち並ぶ不思議なモアイ像に想いを馳せて作曲された。「旅行者が観光としてイースター島の風景やモアイ像を肌で味わった感覚ではなく、長い歴史のなかでモアイ像自身が何を見てきたのか、モアイ像の視点になってイースター島の風景や古代から現代までの歴史を縮小化して描写した」と作曲者は語っている。水平線より上る太陽、モアイ像の製造、中間部は4声が絡み合う「八木澤コラール」で、古代人の純粋な精神と信仰心を表現している。後半は他民族との争いの描写、最後はイースター島の美しい自然に感謝の気持ちを込めて盛大に幕を閉じる。今宵、市川市民会館は古代文明のロマンに包まれるだろう。
(作曲家・八木澤教司のホームページ <http://www.horae.dti.ne.jp/~yagisawa/home/>) 作品解説があります

アルメニアンダンス・パート1

Armenian Dances Part 1

アルフレッド・リード

Alfred Reed (b.1921:アメリカ)

第1部「ツィラニー・ツァー」	(あんずの木)	<i>Tzirani Tzar</i>
第2部「ガカヴィ・イエルク」	(やまうずらの歌)	<i>Gakavi Yerk</i>
第3部「ホイ・ナザン・イーム」	(おーい、僕のナザン)	<i>Hoy, Nazan Eem</i>
第4部「アラギヤス」	(アラギヤス山)	<i>Alagyaz</i>
第5部「ニャー・ニャー」	(行け、行け)	<i>Gna, Gna</i>

リードはすでに80歳を越える高齢ながら、今なお精力的に作曲・編曲分野で活躍している。吹奏楽のために数多くの作品を手掛け、吹奏楽に携わる人なら、誰もが知っている作曲家であると言える。リードの作品は民族色豊かなものが多いのが特徴で、この「アルメニアンダンス」も、アルメニアの民族音楽に惹かれ、その収集で知られた、コミダス・ヴァルダベッド(1869-1935)の集めた音楽集から、5曲が引用され、1972年に作曲された。なお、今回は残念ながら演奏出来ないが、この曲には同様に作曲された続編「パート2」(1975)が存在する。

冒頭の金管楽器によるファンファーレは、吹奏楽の金管奏者なら1度は吹いてみたいと憧れるもの。曲は輝かしく幕開けとなり、全5部構成でドラマティックに展開される。時に美しく、時にスリリングとなり、各曲の境界は明瞭であるが、曲は止まらずに一気に演奏される。

2年生合同バンド 7校合同・総勢100名

ヘリオス

Herios

ヤン・ヴァンデルロースト

Jan Van der Roost (b.1956: ベルギー)

ヴァンデルローストは、母国のレマンス音楽院で教授職を務め、後進の育成に務める傍ら、作曲活動を行っている。世界中の団体から作曲依頼があり、数年先まで予定が埋まっているほどで、吹奏楽界で最も人気がある作曲家の1人と言って良いだろう。難度の高い交響曲から、中高校生でも十分に演奏可能なものまで幅広くあり、高く評価されているものが多い。

今回演奏する「ヘリオス」は、日本の金管バンドの委嘱を受けて、2003年に作曲された曲で、吹奏楽版は最近出版された。前回のジョイントで2年バンドが演奏した「アルセナール」と同様に、ブリティッシュマーチ風で書かれている。ヘリオスとはギリシャ神話の太陽神の名前。

オリент急行

Orient Express

フィリップ・スパーク

Philip Sparke (b.1951: イギリス)

1883年に誕生した超豪華列車「オリент急行」は、列車内の豪華な装飾、一流シェフによる食事、高級ホテル並みのサービスなど、ヨーロッパ社交界の話題を独占し、人々の心を魅了した。作家のアガサ・クリスティ(1890-1976)もその1人で、1934年に推理小説「オリент急行殺人事件」を発表している。当時はオリент急行の全盛期で、ヨーロッパ大陸にいくつかの路線が設定されていた。クリスティの小説は1974年に映画化されたが、当のオリент急行は相次ぐ航空路線の開設により、輸送としての競争力を失い、1977年に全面的に廃止された。しかし1982年、ロンドン(英) - ベネチア(伊)を結ぶ国際列車として、華々しく復活し、現在に至る。なお、昔は蒸気機関車であったが、現在は電気機関車が牽引している。

スパークは1986年、BBC放送(英国国営放送)の委嘱により、この超豪華列車を題材にした金管バンド曲を作曲した。ロンドンのヴィクトリア駅の情景から始まり、車掌のホイッスルで汽車は動き出す。最初は快調に進む列車も山間部に差し掛かると、機関車は力を振り絞りながら登って行く。中間部は旅人の望郷の想いを表現しており、ロマンティックな旋律が奏でられる。最後は終点ベネチアへ向けて快走するといった内容である。1992年に吹奏楽版が出版されるや、瞬く間に話題となった。短時間ではあるが、超豪華列車の旅をお楽しみに。

ソロモン王の洞窟 - 10の交響的情景

King Solomon's Mines - Ten Symphonic Scenes

ナイジェル・クラーク

Nigel Clark (b.1960: イギリス)

H.R.ハガード(1856-1925: イギリス)の冒険小説「ソロモン王の洞窟」(1885)は、アフリカの奥地に眠る、二千数百年前に栄華を誇ったソロモン王の秘宝をめぐる物語。狩猟家として名高いアラン・クォーターメインは、英国の紳士カーティス卿とその友人の元海軍士官グッド大佐と知り合い、カーティス卿から「ソロモンの秘宝を求めてアフリカ奥地へと探検に出たまま行方不明となった弟を捜してほしい」という依頼を受ける。3人は1枚の古地図を頼りにアフリカの奥地へと向かう。この小説が書かれた当時、アフリカ大陸は未開の地であった。読者の想いをかき立てた小説で、後に多くの冒険映画にも影響を与えたことで知られている。

クラークはロンドン王立音楽院で助手を務める作曲家。この曲は冒険小説「ソロモン王の洞窟」を題材として、物語の10の情景を音楽にしたクラークの最新作である。原作小説は全20章から成り、物語全部が曲に描かれている訳ではないが、ソロモン街道に始まり、主人公アラン・クォーターメインの登場、ついに神秘的なソロモン王の秘宝へ。脱出するシーンも巧みに表現されている。細かなニュアンスは不明な点もあるが、情景を思い浮かべながら音楽に身を委ねていると、様々な情景が思い浮かび、忘れかけていた冒険心が呼び覚まされるような感覚になる作品である。最後は物語の終幕らしく大変華々しく突き進む。今回は2年生約100名の大編成で、この壮大な冒険物語に挑む。これぞジョイント、お聴き逃がしなく！